

『空華集』の絶句における「茶」の表現

—空間の変化をめぐる—

胡 睿 慈*

1. はじめに

『空華集』は五山文学の双璧の一人と認められる義堂周信（一三二五—一三八八）の詩文集である。主に絶句を収めた巻一から巻六において、「茶」をテーマとし、或いは「茶」を一つの表現として使った作品は31首ある。

芳賀幸四郎氏は『わび茶の研究』の中、中世に入ると、茶は「睡魔を退治する覚醒剤」の効能だけでなく、「趣味的な嗜好飲料」として愛飲されていると述べた。氏は、「当時『贈答詩』と『茶趣・茶境』を詠じた詩の増えることは、飲茶風潮の勃興を反映している」¹と指摘し、当時の禅僧の外集にも、中国の古き方式である団茶を煮る方法の採用も見えると述べた。さらに、詩句における茶の働きについて、芳賀氏は義堂周信、及び同時代の虎関師練、明極楚俊の茶詩を例として挙げ、下記のとおり述べた²。

彼らの茶に期待したものが、腋下に羽翼を生じ十方虚空狭しと物外に逍遙し、羽化登仙することであり、その茶趣が老荘神仙思想と結ぶものであったことを雄弁に物語るものだからである。（中略）南北朝時代の禅林の茶趣は、禅の思想よりも老荘思想に傾斜したものであった、とあって大過ないであろう。

芳賀氏の説を踏まえれば、南北朝時代の詩人たちの茶に対する考えは主に「神仙思想」における「羽化登仙」に注目して、禅の思想はより少ないこと

が分かった。周信の茶詩を読み解いてみると、現実から夢、或いは、現実から仙境に渡る異質の空間の変化という作詩方法は常に使われている。また、広い空間から狭い空間へ、外から内に、或いは空間における時間の長さの変化という描写はよく見られる。これは茶によって仙境に渡れる認識から影響を受けたと考えられる。そして、絶句における「茶」は、主に音、香りという無形の形で、空間転換の中間媒介として扱ったものも見られる。

周信の茶の絶句における空間には、主に「現実の空間」と「意識の空間」が見られる。「現実の空間」は、物理的で、現に事実として存在している空間で、主に詩人の居場所を示したものである。一方で、「意識の空間」は詩人の精神的な面を反映して、感覚によって生まれる空間、或いは夢を指すものである。本報告では、茶の絶句における「意識の空間」から分析を始め、さらに空間の変化とその対応性を論じる。周信の茶に関わる絶句における空間を把握してから、周信の茶の表現を分析していきたい。

2. 意識の空間

前述に言及した通り、茶は「覚醒剤」の効用があって、唐代からその特徴を讃える詩文が少なくない³。「覚醒剤」として扱っているので、『空華集』の中に描かれた茶の特徴は主に二つある。それは夢から喚起された効能、及び仙境に辿り着ける功用である。次に「謝素中惠茶」と「次韻謝白雲林翁惠團茶」を例として挙げ、詩文の中に見える仙

*国立台湾大学大学院生

境と夢の空間を分析し、さらに「現実の空間」との関連性を検討したい。

2.1 仙境である「意識の空間」

まず、「次韻謝白雲林翁惠團茶 三首」⁴で、「意識の空間」における仙境を分析したい。

その一

故人頒賜小團龍
一啜冷然欲御風
弱水蓬萊何用問
全身已在白雲中

これは友人から小團龍をもらって、啜ると風を御するほどの爽快感を詠じた絶句である。第二句の「弱水」と「蓬萊」では達しがたい仙境を喩えている。ここで茶の味を嘗めると、自分にいまの心境を聞く必要がない気持ちを表す。それはなぜかという、もうすでに「白雲」の境界に辿ったからである。

第一句で小團龍をもらった原因を述べ、続いて茶の清々しい味を「冷然欲御風」と喩えた。その風のような爽快感を持っている味を通し、詩人は仙境に辿り着けた。ここでは茶の味を通して「現実の空間」から「意識の空間」へ転換した。第四句の「白雲」は、茶椀から立ち上がる水蒸気を喩えとして用いられた言葉である。『莊子・天地』には雲に乗って仙境に到る記述がある。

夫聖人、鶉居而鷄食、鳥行而無_レ彰。天下有_レ道、則與_レ物皆昌。天下無_レ道、則修_レ德就_レ閑。千歲厭_レ世、去而上僊。乘_レ彼白雲、至_レ於帝鄉。三患莫_レ至、身常無_レ殃。則何辱之有_レ⁵（下線は筆者より）

『新釈漢文大系』の注釈によると、「上僊」は「仙境にのぼる」と解釈できる。この段落では、封人の言葉を通して「無為自然」の心境を解答した。天下に道が行われていれば、万物とともに栄え、天下に道がなければ、徳を修めて静かにしている。千年を長生きして世を飽きたら、仙境に渡る。順応する心をその通り表した。最後の「乗彼白雲、

至於帝郷」によれば、『莊子・天地』における「帝郷」は自在に行ったり来たりする「意識の空間」であると言えよう。しかし、「白雲」で仙境にのぼるイメージは如何に第四句の「白雲中」と類似したが、内容の面についてやはり違っている。周信の作品を読み解いてみると、「意識の空間」に到達できるが、ある程度の制限が見られる。むしろ、茶によらないと、「意識の空間」に到達できないと考えられる。二首目で、この自由の制限も示した。

さらに、第二句に書かれた「一啜冷然欲御風」は、『莊子』から影響を受けたと推測できる。『莊子・逍遙遊』には、「夫列子御風而行、冷然善也、旬有五日而反（下線は筆者より）」⁶という記述もある。列子は風に乗って浮かれ歩いて、十五日後に再び回帰するのを述べた。「御風」について、許抗生氏は『老子・東洋思想の大河』で、「風を御して行く」を下記の通り説明した。

これは非常に自由であるといえる。歩かずに風に乗って気ままに行く。しかし結局のところ、風に頼り風に制限されている。風は「待むところ有る」ものである。風に頼らなければ気ままに行くこと（游⁷）ができないから、これもまた制限付きの自由であるといえる⁸。これに従って、『莊子・逍遙遊』における「風を御して行く」ことは、また理想的な自由ではないことが分かった。許氏の説を踏まえれば、理想的な「逍遙遊」とは、

なにものに制限されない「游」のことで、これはあらゆる自我と外物を超越した人にだけ達することができる境地である。外物の制限があれば、精神はそれに拘束され邪魔されることになる。精神的逍遙を得るためには、外物をいっさい越えなければならない⁹

ということである。従って、周信の作品における「現実の空間」の超越は、「風」でその制限を示し、一時的な超脱しかできなかったことを示している。これは後の二首目と合わせてみると、その超脱し

ている間の時間の短さが見られると思う。

一首目では、「現実の空間」から「意識の空間」に到着したのを詠じた。また、第二首は続いて、仙境の白雲郷と現実の病床の対応を表し、さらに白雲郷から現実へ戻ることを描いた。

その二

全身夢入_二白雲郷_一
不_レ覺_三全身在_二病床_一
一陣清風吹_レ雨過
小團碾_レ月試_二新涼_一

二首目は、白雲郷の仙境の空間から場面を開けた。第一句を続いて詩人は「現実の空間」にいる自分は病を抱いて病床の上に日々を過ごしたことを描いた。「白雲」の軽いイメージと「病床に臥す」という重いイメージで、仙境である「意識の空間」と「現実の空間」との対比を表した。「意識の空間」にいる自分は、「現実の空間」の厳しさが忘れられる。ここで、茶の精神的な麻酔の効能も示した。また、第三句は、風が雨雲を吹き散らして、詩人の意識を現実に戻したことを詠んだ。ここは、「現実の空間」に戻ったため、感覚の面ではなく、もっと外見的で視覚的な角度から茶の見かけを描写した。詩人は感覚の世界から「現実の空間」に戻って、改めて団茶の外観を見て、それを磨いて新たな茶一椀を作り始めたのである。また、「意識の空間」に辿るのを期待する気持ちは「試新涼」で表現した。

二首目と一首目の空間の転換について、一首目は「現実」から「精神」へ、二首目は「精神」から「現実」への変化が見える。そして、二首目の「一陣清風吹雨過」はむしろ、一首目の「一啜冷然欲御風」に呼応すると思える。茶の清々しい味を風に喩え、風で仙境に到る、風で仙境から戻るという旨趣を表した。これも前述に触れた『莊子・逍遙遊』に言及した「風を御して行く」の境界であると思う。

三首目の空間をさらに広めて、自分から世間の人々の苦しみに視点を変えた。三首目の最後の二

句で、世間の人々が抱えている悩みに堪えず、師匠の恵みの言葉を期待していることを詠じた。

その三

新涼入_レ座讀_二新詩_一
正是人間三伏時
熱惱衆生吾豈奈
傾_二甘露雨_一只憑_レ師

一首目と二首目は主に茶によつての空間の転換と自分の心境の解放に重点を置いた。但し、三首目で、詩人は自分の空間を脱離し、世間のことに関心を持ってきた。この組み立て及び空間の転換は唐代の盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」における空間の転換と類似する。周信の茶の絶句を読むと、盧仝の「茶歌」を踏まえた表現はよく見られる。例えば、「翻却盧同七椀茶 客來何以當生涯」¹⁰、「彈壓盧同三百片 洞中春色上眉端」¹¹という句で、盧仝及び盧仝の七椀茶を詠まれた詩文であり、「消得玉川茶一椀 不勞驅逐也奔忙」¹²は盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」を踏まえて作った句である。従って、盧仝の詩文における茶の表現は周信の茶に対して一つ不可欠な影響であると思える。

盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」¹³では、まず幅広く茶をもらった状況と茶の外観を描写した。中には「軍將打門驚周公」と「柴門反關無俗客」という句によって、盧仝の所在地は自分の家、また周信と同じく「現実の空間」における部屋であると分かった。そうして、盧仝は茶を飲んだ心境の変化を描いた。「三碗搜枯腸、唯有文字五千卷。」と「四碗發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散。」で、「現実の空間」から脱離し始め、「意識の空間」へ至った前の気分の変化を描いた。続いて「五碗肌骨清、六碗通仙靈。七碗喫不得也、唯覺兩腋習習清風生」で、より一層「羽化登仙」の境界を描いた。しかし、のちの「蓬來山、在何處。玉川子、乘此清風欲歸去。」で、仙境である「意識の空間」を求める気持ちを表した。これに従って、盧仝の詩文における仙境という「意識の空間」は世間の悩みを避けられる隠遁の空間である。いくら自分の

部屋に隠遁しても、一旦その「現実の空間」にいったら、「軍將打門驚周公」という俗世に邪魔される状況も避けられないわけである。これによると、茶によって「現実の空間」から隠遁の空間を指す「意識の空間」に移る特徴が目された。

盧仝の「茶歌」に対して、周信の「次韻謝白雲林翁惠團茶」に「現実の空間」の苦悩から脱離の特徴を強調した空間の転換も見られる。また、盧仝の「茶歌」と同じく、自分の仙境に到達しようとする気持ちを表した一方で、最後に世間に対する関心も示した。

2.2 夢である「意識の空間」

また「現実の空間」から「意識の空間」への転換が見える「謝素中惠茶」¹⁴を例として挙げたいと思う。

午窓獨掩睡初濃
春夢尋君過水東
相見未酌芳草句
覺來茶鼎吼松風

「謝素中惠茶」では、昼寝をしている時、見た夢の話を描いた。夢の中には、詩人は友達を探すために、水の東まで越えた。但し、友人に礼として作った詩文を贈っていなかったまま目が覚めた。詩人を起こしたのは、茶の沸いた音であった。

第一句の「午窓」とは昼寝という意味で、同時に室内の場面も表して、「現実の空間」を作った。そして、第一句の最後の「睡初濃」で、「意識の空間」に渡るキーワードである。それは、続いて第二句の夢である「意識の空間」を開けたのである。「意識の空間」における水の東を越える場面を通じて、夢の空間の広さを示した。それは周信の部屋と対比性で成り立っている。「意識の空間」は無限的なイメージを持っている一方、「現実の空間」は制限された部屋で示した。

最後の一句「覺來茶鼎吼松風」で再び「現実の空間」に戻ってきたことが見られる。言い換えれば、無限な「意識の空間」から、部屋という比較

的に範囲の狭い「現実の空間」に戻ってきたのである。また、もう一つ注目したいのは、「意識の空間」における時間と「現実の空間」における時間との対比性である。

「意識の空間」における時間と「現実の空間」における時間は対応的な関係として処理された。「意識の空間」に於いて、水の東を越えた場面では空間の広さだけでなく、時間の長さも示したと考えられる。それでもなお、最後の「覺來茶鼎吼松風」という句により、詩人が「意識の空間」にいる時間はちょうど茶一碗を沸かす時間が見える。この「意識の空間」と「現実の空間」の対応性は唐代伝奇に収めた「枕中記」の概念と類似する。

「枕中記」は青年盧生が、邯鄲の旅籠で道士の呂翁に出会った話である。上達の夢見を叶わないと嘆く盧生に、呂翁は枕を与える。眠りに落ちた盧生は、夢の中で官吏になる。栄華を極めるのを体験してから、二度も左遷になってしまって、八十歳で他界になる。しかしながら、目が覚めると、宿の主が蒸していた黍が、また煮あがっていなかった。盧生の夢という「意識の空間」における時間の長さ、宿にいる「現実の空間」における時間の長さとの対応性によって、人生の儚さというモチーフを提出した。黒田真由美氏の『枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他（唐代Ⅱ）』には「枕中記」と「南柯太守伝」の類似性を提出して、二つの物語では老荘的価値観が見られることを指摘した。

（前略）「邯鄲の夢」「南柯の夢」と同類の故事成語として用いられている「枕中記」と比較すれば、その好事家趣味はより明らかである。二作は、人生の儚さと栄達の空しさという老荘的価値観を共有している（後略）¹⁵

従って、「枕中記」は、「意識の空間」と「現実の空間」で「人生の儚さと栄達の空しさ」という価値観を表したと考えられる。『空華集』を読むと、「枕中記」を踏まえて創作した詩句も少なくないのが分かった。「病中謝楷侍者且留之云」¹⁶には「客窓日月邯鄲枕、世路風波灑瀕堆」がその一

例である。

周信の詩文を読み解くと、「意識の空間」より、「現実の空間」の方になおいっそう注目したと思う。換言すれば、「意識の空間」における時間の長さ、及び空間の無限さを描写しながら、「現実の空間」の制限は「意識の空間」の対照としてさらに強調されたのである。いくら「意識の空間」に長く滞在することを感じたが、改めて「現実の空間」に戻ることを避けられない。むしろ「意識の空間」との対比によって、強く在俗の考えを示すのである。この考えは周信の生涯でずっと官海に浮かんでいる命運と関連性があると思う。

周信の茶詩の中に、「現実の空間」の中で超越した境界に達する心境を詠じた作品もある。次の節で「謝霜月山主恵茶」を例として挙げて分析したい。

3. 現実の空間

周信の茶詩には、部屋の空間は常に用いられる。茶が疲労回復の効能を持っているので、その特徴を強調した表現がよく用いられる。従って、睡眠から喚起された場面や、疲労を解消した場面などは『空華集』の茶詩の中によく見える¹⁷。殊に部屋に寝ている場面は周信の茶詩によく使われた表現である。周信の体が孱弱だったため、ほとんどの時間は部屋に過ごしたことも一つの原因であると考えられる。

詩文に於いて、部屋という室内の空間に対応して外の空間を詠じるのも見える。周信は室内と外の環境との対応関係を利用して自分の心境を描いたと考えられる。

「謝霜月山主恵茶」¹⁸を例として挙げておこう。

春風千葉雨前茶
一夜吹_レ香到_レ我家_一
喚起周公寒不_レ寐
座看_三霜月洒_二梅花_一

雨前茶の香りは風によって詩人の家に着き、寝

ている詩人を喚起した。起きた詩人は春夜の寒さに堪えず寝れなくなって、外の雪景を楽しんだ心境を詠じたのである。

この詩における「現実の空間」は「外」の自然の空間と「内」の詩人の家に分けられる。場面を見ると、第一句は、春風が吹くことから、自然の環境に栽培された雨前茶の香りを提示した。形が定まらない春風で制限のないイメージを読者に連想させる。そして「千葉」という言葉で、茶の葉が盛んに生い茂るイメージを示した。この描写によって自然の環境の広さと無限さを表現したと思う。

第一句と第二句の場面から、広大で無限な自然の環境から比較的狭くて四面に壁のある部屋へ移ることが見える。従って、第一句と第二句における空間の関係は、「外」から「内」への移りだけでなく、「広大で無限な」空間から「狭くて制限のある」空間への移動も示した。こうして詩人は自然の広大で無限なイメージが自分の存在している空間に吹き込んだのを示したと思う。また、茶は香りという無形の形で自然環境である「外」の空間を詩人の部屋である「内」の空間に結びついて、媒介として使われた。

第一句と第二句で、自然と部屋の連結は茶の香りであることを描いた。さらに、第三、四句で周信は茶によって境界の変化を詠んだ。茶の香りを嗅ぐと、周信は眠りから目覚めた。春夜の寒さを堪えず、眠れなくなってしまって、窓外の景色を眺めて楽しんでた。空間は改めて、室内である「内」から、自然環境である「外」に移った。しかしながら、茶の香りで喚起された詩人は「外」の自然環境だけ意識しているわけではなく、同時に自然の空間の無限さも気づいたと考えられる。

第二句における「我家」という言葉から、室内の空間は詩人の存在している、或いは詩人に所属する空間の認識を強く示す。しかし、第四句に入ると、自然の無限な空間にいるのに気づいたゆえ、自分の空間に対する認識は比較的薄くなった。従って、第三句と第四句を読むと、詩人の存

在している室内の空間はもう自然環境の一部として扱っている。言い換えれば、詩人は茶の香りによって自然と融合して、「無我」の境界に到るのである。この作品を通して、詩僧の周信が茶によって「現実の空間」における落ち着きを感じた心境をうかがい知ることができると思う。

4. おわりに

本報告では、義堂周信の茶の絶句における空間の変化を分析した。「次韻謝白雲林翁惠團茶」、「謝素中惠茶」を例として挙げ、「現実の空間」から「意識の空間」に達して、また「意識の空間」から「現実の空間」へ戻るのを論じた。両空間における時間の長さや空間の広さは常に対比関係として用いられる。また「謝霜月山主惠茶」を「現実の空間」における「外」と「内」の対比に関わる例として挙げた。「現実の空間」における「外」と「内」の対比で、周信は自らの制限を表した。しかし、最後の二句で「内」と「外」の結合を示し、「無我」の境界を詠じた。また、茶は常に嗅覚的、聴覚的な形で、「現実の空間」と「意識の空間」、「外」と「内」を連結した媒介として使われる。

『空華集』における茶詩の中に、「神仙思想」だけでなく、禅宗の公案を踏まえて作った作品もまればない。『空華集』の茶詩における禅宗思想の考察は今後の課題にしたいと思う。

注

- 1 芳賀幸四郎 (1978) 『わび茶の研究』、淡交社：p.23
- 2 同注1：p.24
- 3 例として挙げれば、唐代の寂皎然の「飲茶歌詠崔石使君」に「一飲滌昏寐」や「再飲清我神」などの描写がある。劉言史の「與孟郊洛北野泉上煎茶」に「滌盡昏渴神」などの句がある。
- 4 上村観光 (1992) 『五山文学全集 第二巻』、同朋社：p.1419。本報告に載せる義堂周信の絶句は上村観光氏が編集した『五山文学全集 第二巻』に載せた『空華集』によって引用された作品である。引用文の内容は旧体字である。

- 5 市川安司、遠藤哲夫 (1967) 『新釈漢文大系 第8巻 莊子』、明治書院：p.374
- 6 陳鼓應 (1983) 「逍遙遊」『莊子今注今譯 上』、中華書局：p.14
- 7 「遊」の簡体字は「游」である。引用した許抗生氏の資料はもともと中国語の簡体字で書かれたので、ここで原文を引用していただきたいと思う。
- 8 許抗生 (1993) 『老子・東洋思想の大河』、地湧社：p.63
- 9 同注8：p.63
- 10 詩題は「正古知客出報國在中偈索和」。同注5：p.1390
- 11 詩題は「謝雲溪書記惠團茶」。同注5：p.1425
- 12 詩題は「謝悟菴居士惠茶」。同注5：p.1394
- 13 石川忠久 (2011) 『茶をうたう詩—『詠茶詩録』詳解』、研文出版：pp.99-101
- 14 同注5：p.1376
- 15 竹田晃編集・黒田真由美著 (2006) 『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他〈唐代II〉』、明治書院：p.160
- 16 同注5：p.1532
- 17 本報告に分析した「謝霜月山主惠茶」と「謝素中惠茶」を除き、また「謝悟菴居士惠茶」における「老來轉覺睡魔強」、「重和」における「一椀倘茶擊未暇」、「謝九峯古天二兄惠茶」における「老夫懶甚貪春睡、喚起惺惺打座禪」などは、睡眠の場面の多用が見られる例である。
- 18 同注5：p.1423

テキスト

上村観光 (1973) 『五山文学全集 第二巻』、同朋舎

参考文献 (年代順)

- 室伏高信 (1935) 『莊子』、大東出版
 池田四郎次郎編集 (1972) 『日本詩話叢書』、鳳出版
 芳賀幸四郎 (1978) 『わび茶の研究』、淡交社
 陳鼓應 (1983) 『莊子今注今譯』、中華書局
 許抗生 (1993) 『老子・東洋思想の大河—道家・道教・仏教』、地湧社
 石韶華 (1996) 『宋代詠茶詩研究』、文津出版
 蔭木英雄 (1999) 『日本漢詩人選集3 義堂周信』、研文出版
 竹田晃編集・黒田真由美著 (2006) 『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他〈唐代II〉』、明治書院
 石川忠久 (2011) 『茶をうたう詩—『詠茶詩録』詳解』、研文出版